



## 受難の主日 (ルカ 23:1-49△22:14-23:56)

百人隊長さえもイエスに心動かされた

受難の主日、聖なる一週間が始まりました。受難の朗読が読まれました。できれば聖木曜日、聖金曜日、復活徹夜祭聖なる三日間をあずかって再び場面を思い返してください。聖なる三日間を連続して参加できない方々のために、今日の受難の朗読があると考えてほしいと思います。

私はこの聖なる一週間で、百人隊長の目で眺めながら、考えてみたいと思いました。今日の受難の朗読の終わりに百人隊長は登場し、「この出来事を見て、神を賛美して」言います。「本当に、この人は正しい人だった。」

百人隊長の置かれている立場はどんなもののでしょうか。彼はまず、百人の兵士を束ねる隊長です。百人の命をあずかる責任者です。さらにローマ軍の兵士ですから、どのような命令であれ、命じられたことが実行されるように動かなければなりません。不当な命令であっても、それを拒むことは許されない立場でした。

また、彼はイエス・キリストに特別な感情を持っていません。彼はユダヤ人ではないからです。イエスに同情するわけでも、イエスに敵対するわけでもないのです。言ってみれば、不正な裁判でイエスが死ぬことになっても、心に何の感情も湧かないはずの人なのです。その百人隊長が、「本当に、この人は正しい人だった」と漏らしました。

この百人隊長の言葉から、私は二つのことを考えました。一つは、イエスの死の出来事は、何の関係もないローマ軍の兵士にも、何が正しくて、何が間違っているのかを理解させる圧倒的な力を持っていたということです。死のうが死ぬまいがどうでもよい他人でさえも、イエスの死に心を動かされた。それは当時も、のちの時代も、今の21世紀でも変わらない説得力があるということです。

もう一つは、これだけのことが起こりながら、ユダヤ人は「本当に、この人は正しい人だった」と理解できなかったということです。仮に理解したとしても、人間的にはイエスが亡くなってようやく理解したのは手遅れなのです。理解するなら、もっと早く気づいて、イエスが死刑の宣告を受けることのないようにしなければならなかったはずです。

この百人隊長の言葉を、今年の聖週間を黙想する鍵にしたいと思っています。イエスの死は、どんなに縁遠い人にも心を動かす力があるのに、なぜ身近な人が、イエスを死に追いやったのでしょうか。私たちも含めて、なぜイエスの死をただ黙って見ているのでしょうか。気づくのが遅くて、もはや手遅れになっているとして、私たちはイエスとどのように向き合うべきでしょうか。

私たちはこれらのことをこの一週間かけて思い巡らしましょう。私たちが救うイエス・キリストと真剣に向き合う一週間としましょう。